

令和元年8月号

◆池田亮二 選 ～アウトサイダーの句①～

いわゆる伝統俳句というのが五七五というスーツに季語というネクタイを締めたフォーマルな姿とすれば、無季自由律はカジュアルな姿といえる。ポロシャツにサンダル、女性のあられもないヘソ出しルックまで、自由気ままなスタイルである。どういう姿が良いか悪いかは兎も角として、一旦フォーマルな姿を脱ぎ脱ぎ捨てると、むき出しの人間性や思いもかけぬ発想が現れる。俳句の姿にもいろいろあり、時に露悪的であったり、何を言っているのか分からないものもあるが、そのいささはみ出した句の中から、私なりに面白いと思うものを拾ってみた。

こわい女

初嵐して人の機嫌はとれませぬ 三橋鷹女

夏痩せて嫌ひなものは嫌ひなり 鷹女

こういう句をつきつけられると一瞬どきりとする。嫌われているのは俺のことかと。男は気に入らないことには色々理屈を並べたてるが、女は単刀直入、「嫌いよ」と切り捨てる。いったい何が嫌なのか？

一九三四年（昭和九年）、日野草城が「ミヤコホテル」と題して新婚初夜を想像して詠んだ「けふよりの妻ときて泊つる宵の春」など一連の句を発表したことから大騒ぎとなった。草田男は厚顔無恥な！ と非難し、虚子は激怒して草城をホトトギスから追放した。一方、新興俳句の三鬼、不死男らは激賞し、外野からは室生犀星が「小説でもこれくらい迫れるか」と絶賛する。性愛を詠むことは是か非か、好きか嫌いか、その対立は今日でも続いている。もう一つ当時の時代背景として、日中戦争が始まり、軍国主義による言論統制の中、風俗の取締りも厳しく、社会や戦争など自由なテーマで詠む俳人が片端から検挙された。この時期、多くの俳人が沈黙し、転向する中で、嫌いなものは嫌いと言いつけることは、それが何を暗示しているかにかかわらず、勇気のいることだった。

宗左近は、鷹女を依怙地で奇妙な女と評しているが、つい先頃まで、少し突っ張ったもの言いをする女性はみな「変った女」と片付けられたのだ。

変身願望

悪女たらむ氷ことごとく割り歩む 山田みづえ

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉 鷹女

春浪に女は尾鰭のなき嘆き 鷹女

道成寺の清姫や鶴の恩返しなど、女は蛇になったり鶴になったり、一途な女の男への愛憎の果ての変身譚はいろいろある。だが、現代のみづえ、鷹女の変身願望は少し趣が違う。鬼女になりたいというのは、愛する男への執念というより、先に挙げた「嫌いなものは嫌い」の流れで、「ただの貞淑温順な女じゃないわよ」「なめるんじゃないよ」といった意気が感じられる。山田みづえもやはり軍国時代の育ちで、戦後の荒廃期に青春を過ごした世代。良家のお嬢さんで、ホトトギス風の句でも詠んでいるのが似合いそうな風情なのに、悪女たらんという下心があるとは。戦後の新時代が始まったというのに、相変わらず旧弊にしがみついている輩への宣戦布告のような勇ましさである。

かと思うと三句目、砂浜に水着姿で寝そべっていた女が、突然、人魚姫にでも変身して遠くへ泳いでいってしまったら、男はどうしたらいいのだろう。愛していると思っていた女が、気まぐれに、さらりと逃げていってしまったら。

乳房礼賛

髪洗うとき乳房の機嫌よき 石原八束

乳房やああ身をそらす春の虹 富沢赤黄男

大いなる乳房を沈め泳ぎ出す 鈴木六林男

おそるべき君等の乳房夏来る 西東三鬼

すばらしい乳房だ蚊がいる 尾崎放哉

赤い羽根つけて推定Fカップ 五十嵐箏曲

八束の「機嫌のいい乳房」ってどんな乳房？ などと聞くのは野暮なこと。乳

房だって泣いたり笑ったりするのだ。女性のヌードを描くこともはばかられた時代、乳房礼賛はぎりぎりのエロチシズム表現だった。日本女性のつつまじき乳房ながら。

放哉のような世捨て人が、小豆島の寺の一隅で病み衰えて死を直前にして、こういう句を詠んでいる。この時期、寝たきりの彼を訪れる人は無く、居たのは彼の下世話までしてくれたシゲというおばあさんだけだった。もしかしたら、放哉が見たのは、この漁師のおばあさんの日焼けしたたくましい(?)乳房だったのかもしれないが。

五十嵐箏曲だけが平成の現代っ子で、その句はまぎれもない堂々たる巨乳である。

これらはみな男の句。それに対して女性自身は、

ふところに乳房ある憂さ梅雨長き 桂 信子

と嘆いている。女性にとってそれは、いとおしいものか煩わしいお荷物なのか、女心はナゾである。